

満願寺観音堂の仏像彫刻

渋江二郎*

On the Bud'ha Statues of Manganji Temple, Iwado, Yokosuka

(With 4 figures)

Jirō SHIBUYE

横須賀市大矢部町宇岩戸の満願寺は今その廃址のみあって、その境内は広く、本堂の跡には礎石などを見ることが出来る。その背後の石段を上ると一区劃があって観音堂と称する一小宇がある。堂内に観音菩薩、地藏菩薩、不動明王、毘沙門天の四軀の像を安置してある。特に観音菩薩及地藏菩薩の像は製作優れたもので、神奈川県内有数の文化財であるから紹介して置き度い。

満願寺は臨済宗建長寺派大矢部満昌寺末。開山大達明岩正因、開基佐原十郎義連、法諱満願寺天岩義連大禪定門。三浦義明の子、木曾義仲の側室で勇婦として名高い巴御前と一騎打ちしてそれを生け捕ったと伝えられる。佐原に住んで佐原十郎と称した。佐原は岩戸から約一キロ南である。

新編相模風土記稿には満願寺の本尊は釈迦如来像とあるが、現在はその像は寺の本堂と共に失なわれている。

観音堂の本尊は聖観音菩薩立像一軀で寄木造、玉眼嵌入、像高 226.3 センチ。頭部と体軀は別木で作られ、体軀は前後の矧ぎ合わせ、両手は肩で矧ぎ付けになっている。鎌倉時代初期の像で県内有数の像。県内にこの時期にのぼり得る像の数は少なく、多くは鎌倉中期以後に属するもので、この像よりやや古いものであるが、中郡伊勢原町宝城坊の阿弥陀、薬師、日光、月光菩薩像と横須賀市芦名浄楽寺の阿弥陀三尊像などを類似の像ということが出来るであろう。藤原時代の古様を伝えてはいるが、浄楽寺の像と共に体軀に写実的な動勢を持った運慶の流風を受けた量感にあふれた堂々たる巨像であるといえる。常楽寺の像よりもややおくれるがやはり年代の早い頃をその製作時期と考えることが出来るのではないか。鎌倉時代風の起伏の多い衣文は未だあらわれず、藤原時代の静かな線條で統一されている。

地藏菩薩立像一軀は同じく寄木造、玉眼嵌入の像で、像高 203 センチ。表面に白色の塗料が塗ってあり、いちぢるしく尊容をきざつつけているが、この白色塗料は最近のもので胡粉であり膠質がきいていないから遠からず全部はがれてしまうであろう。その際ぬり直しなどせず、そのままに保存するよう注意すべきである。製作の時期も作者も聖観音立像と同じと見るべきであろう。この二軀は堂内安置の四像の中特にすぐれている。

不動明王立像一軀は寄木造玉眼嵌入で像高 163 センチ。前記二像よりやや小型であり、寄木法も体軀は左右矧ぎで製作の時期は前二者よりおくれるものと考えられる。

毘沙門天立像一軀は寄木造玉眼嵌入、像高 163 センチ。この像もやはり不動明王像と同じくややおくれる像である。しかし、製作の時期は鎌倉を中心とする鎌倉後期の写実主義の影響は見られず、前代の遺風をのこしながら前代ののびやかな造形能力を失いつつあった時期のものとして鎌倉中期にかかるものと考えたい。

ちなみに聖観音像は伝説によれば佐原十郎義連 7 尺 5 寸の巨軀を写した彼の肖像であると伝える。これらの四像いずれも持物、光背台座は後補のものであり、天衣、衣端などにも後補がある。

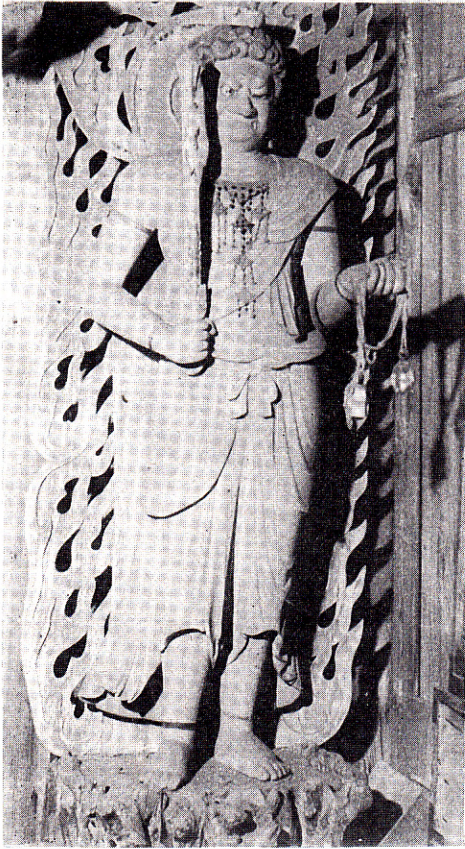
* 鎌倉国宝館



観音菩薩立像



地藏菩薩立像



不動明王立像



毘沙門天立像

これらの四軀の像が今観音堂にのこっているが、聖観音菩薩立像は体軀のひねり方や持物などからみて阿弥陀如来の脇侍として勢至菩薩と一対をなすものと考えられ、造立の当初は阿弥陀三尊と不動明王、毘沙門天と五軀の像を一具としたものであったとすべきであろう。芦名浄楽寺にも阿弥陀三尊、不動毘沙門五軀の像があり、和田義盛の時大仏師運慶の手によって製作されたと推定されているが、その同じ五軀の像をそれにならって此処に造立したのでであろう。全部を三浦義連の時製作とするには製作の様式からみて疑問があるが、三浦一族のその後の縁者の立願によって作られたものと解釈してよいであろう。

四軀共胎内銘も未だ発見されず、関連する文献ものこっていないので確実な推定をすることは出来ない。この堂内は管理状況悪く雑然と諸物調度品が置かれているが、中に一軀小像の地藏菩薩坐像がある。この像は前四者とは全く関係なく、時代も室町時代に降るものであるが台座に墨書の銘があって製作も見べきものがあるので書き加えておき度い。

横須賀市の貴重な文化財が永く保存されることが希望されるが、無考な補修などが行なわれて本来の面目を失うようなことのないよう、特に地藏菩薩立像にみられるように拙い彩色で尊容をきずつけるようなことのないよう注意することを、この機会に述べたい。